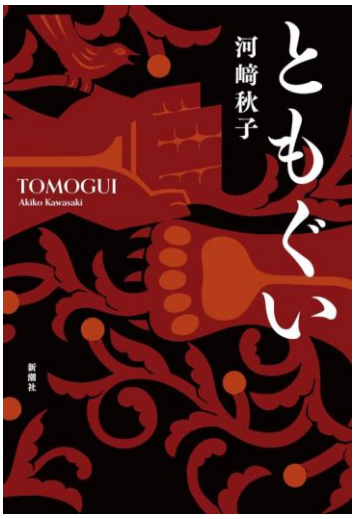
「ともぐい」（河﨑秋子著）熊嵐（吉村昭箸）



12 月に七ツ石小屋に泊まった。小屋番の話では「今年の小屋の予約電話では必ず熊は出るか？と聞かれた」そうだ。奥多摩の熊は冬眠しないので冬でも遭遇する。2023 年の秋は奥多摩だけでなく東北地方で熊が出没した。山菜採りだけでなく町なかでも 217 人が熊に襲われ、最多の６人が亡くなった。北海道東部厚岸では OSO18 というヒグマが 2019 年から 2023 年にかけて 66 頭以上もの牛を襲い 32 頭を殺しながら追跡から逃げていた。しかし７月 30 日に駆除された。
こんなときこの小説を SY さんから貸して頂いた。熊を狩る人間と熊との闘いが熱く描かれている熊小説だ。

明治後期、北海道阿寒湖の近く白糠の村の近くの山中の小屋で猟犬だけと暮らし猟師生活をする熊爪。彼はアイヌに育てられたという父に、猟の仕方や冬山での生活など生きる術を学んだ。物心ついてからは一人で獣のように生きてきた。山中で鹿を討ち、その場でまだ温かい肝臓を喰らう。兎などの小動物も捕るがやはり冬眠明けの熊を狙う。町で熊の毛皮や肝を売り、現金を得る生活だ。あるとき阿寒湖から白糠の近くまで穴持たず（冬眠しない熊）を追ってやってきた猟師太一が仕留め損じ、穴持たずに襲われた。

手負いの穴持たずは太一を襲う。太一は右目を失い、左目も視力が殆ど無い状態で死にかけていたが熊爪に助けられる。手負いの穴持たずは阿寒湖で牛を襲い、肉の味を覚えてしまった。さらに手負いとなった熊は牛や人を襲うだろう。熊爪はこの熊が白糠近くの山中に来たことに恐れを抱く。この熊は必ず牧場を襲い人を襲うだろう。早く仕留めねばと決意する。

ある日、二頭の熊が組み合い闘っていた。一頭は穴持たずだ。あと一頭は若く巨大な赤毛の雄熊だった。凄まじい熊同士の闘い。熊爪は穴持たずに狙いを定め撃つ。しかし弾は頭に当たり怒った穴持たずは熊爪に向かってきた。熊爪の命は助かったが腰骨を骨折した。穴持たずはその後、赤毛に殺された。

この後、熊爪は盲目の陽子と二人で腰の傷を治しながら山中の小屋で暮らし始める。陽子は妊娠している。熊爪の子ではない。しかし受け入れる。３人での小屋暮らし。そして第二子の誕生。獣のように生きる熊爪と家族の命の滴りが描かれている。野生を堪能できる熊小説だった。

20 年程前に読んだ「熊嵐」を思い出した。この本は大正４年 12 月に手塩山脈の西側の山村で起きた事件を下書きにしたドキュメントだ。熊が村を襲い、二日間で６人の男女を殺した。自然の猛威の中で熊と対決する猟師の姿が描かれていた。ともぐいの主人公、熊爪ほどの野人ではないが猟師の矜持は繋がっている。（フカ）

ともぐい　2023 年 11 月 20 日　河﨑秋子著　新潮社　1750 円
熊嵐　　1982 年 11 月 25 日　吉村昭　　新潮文庫　400 円